

---

# ダイの大冒険 ～未来の為に～

どたまかなづち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダイの大冒険 ～未来の為に～

### 【Nコード】

N7799Z

### 【作者名】

どたまかなづち

### 【あらすじ】

いつの間にかダイの大冒険の世界に転生してしまった主人公。原作知識はあるものの、どう動こうか迷いながら未来の為に頑張るお話。

原作用崩壊あるかもです。

第1話の冒頭部分、少し加筆と修正しました。既に加筆修正前に読んでしまった方は、冒頭部分が違うだけなので1話はそこだけ読み返せばOKかもです。

## プロローグ（前書き）

ダイの大冒険の二次小説です。

プロローグなので短めにしました。

次話からは、もう少し長めになる予定です。

原作崩壊する可能性があります。気をつけてください。

オリジナルの主人公がいる事によって、原作にあった展開などが色々変わるかも知れません。

ヒロインは未定です。

## プロローグ

俺は今、間違いなく戦場にいる。

最前線からは少し下がった位置だが、それでも血が流れ、死体が転がり、怒号が飛び交う戦場である。

何故こんな事になっているのだろうか……と頭の片隅で考えながら、遠くに見えるモンスターに対して、魔道士の杖のアイテム効果でメラを放つ。

とりあえず、生き残る為に自分が出来る事を必死でやるしかないのだ。

あの人の為にも、俺はまだこんな所で死ぬ訳にはいかない。

「誰か、回復呪文を使える奴！ こいつを治してやってくれっ！」

その声を聞いた俺は、叫んだ男の元へ駆け足で近寄り、その男が連れてきた怪我をしている男に回復呪文であるホイミを唱える。

呪文を唱えた瞬間、俺の掌から光が現れ、男の怪我を少しずつ治していく。

俺の力量は低く、まだまだ未熟だ。しかしそんな俺のホイミでも、さすがに薬草よりは早く傷を治す事が出来る。

「……ふう、とりあえず肩の大きな傷は治しました。あとは教会に運び、手当て等をしてあげて下さい」

「ああ、すまない。助かった！」

「いえ。それでは俺は他の所へ行きますので」

今ここは戦場だ。申し訳ないが、魔力を節約する為に細かい傷などにまで回復呪文を使う訳にはいかないのだ。

大きな傷も早く治せる回復呪文の使い手が、戦……しかも援軍が来るまで耐える防衛戦で魔力切れをすぐ起こすなんて、論外なのである。

そう、この戦いは防衛戦だ。

明らかに兵士よりもモンスターの方が多いが、皆が必死で戦っている。

何故不利なのに部隊を撤退させないで必死で守っているのか。

それは、俺達がいる場所が村であり、民間人もいるからである。

逃がそうにも、村は四方囲まれており、足が速い者を一人や二人程度ならともかく、集団や女子供を逃がすのは不可能に近い。

その民間人達だが、教会などの村の中では比較的大きな建物で、

怪我人の治療や看病、食事の用意などをしてきている。

兵士達は国の為という理由もあるが、今はそれ以上に滞在中も良くしてくれていた村の人達の為にも、今回あまり戦闘を想定していなかった後方部隊の者達が、誰一人逃げずにいつも以上の実力を発揮して頑張っている。

モンスターの襲撃がある前、自分からの参加を申し出たとはいえまだ10歳という子供である俺は、本来ならば比較的安全であった後方部隊に予定通り配属された。

そして本隊から運ばれてくる怪我人相手への回復呪文や、部隊の雑用などをしていたのである。

いくつかの後方部隊の中でも安全な場所の部隊であり、戦闘があったとしても少数のモンスターと戦う程度という予測だった為、参加するのを許可されたのである。

現在、我が国の本隊が、ある作戦を実行している。

俺達が今必死で守っている村は、その本隊がいる所と王国の間にある村である。

俺は配属された後方部隊で、先輩達に色々学びながら順調に仕事をこなしていた。

村の人達も俺達には積極的に協力してくれていたし、本隊からは実行している前線の作戦も順調に進んでいるという報告もあり、このまま終わるものだと思っていた。

ある晴れた日。そんな考えを嘲笑うかのように大量のモンスターの群れが、村に押し寄せてきた。  
本隊がいる前線が崩れた訳ではない。何故なら、作戦を実行中の前線部隊とは違う方角から、モンスターの群れはやって来たのである。

モンスターの群れによる襲撃があったのが昼頃。今は、もうすぐ日が変わる時間帯だ。既に半日近く戦っており、辺りは暗闇に包まれている。

夜になってモンスター達は本領発揮とばかりに襲撃の激しさは増し、逆に俺達人間は交代で休憩をしているもの、皆疲労は限界に近い。

援軍が来るのはおそらく明け方。つまり、少なくともあと数時間

この防衛戦は続く。  
精神的にもギリギリである。

「こつちも回復頼む！」

「おい、西側の守りが崩れそうだ！ 動ける奴は来てくれ！」

「もう駄目だ……。おしまいだぁ……」

「誰か、倉庫から薬草と毒消し草、あと満月草を取ってきて！ そろそろ補充しないと！！」

そんな声があちらこちらから聞こえる。

少ない人数で多数のモンスター相手に防衛しているので、どうしても怪我人が多く出る。

薬草が大量に使われているのは予想通りだが、前線では思った以上に毒や麻痺を使うモンスターがいるらしく、毒消し草と満月草の減りも早い。

元々後方部隊なので、攻撃呪文より回復呪文を使える者の方が多いが、本来はあくまで安全な場所で仕事をする部隊だった為、呪文の使い手自体が少ない。

補給関係以外だと、最前線で回復呪文による治療を受けた者達を、後方で安静に休ませる場所というだけなので、この部隊が回復呪文を使う事はあまりないのである。

なので、我が部隊の回復呪文の使い手は、一人前とされるの者が数人いる程度だ。

あとは俺みたいなの半人前や見習い、剣術を使う者の中に一応使える程度の者が少しいるくらいだろうか……。



兵士よりも、村に住んでいた僧侶のお爺さんが一番の使い手という有様である。

だからモンスターの群れによる襲撃を受けた時、隊長が皆に厳命した。

アイテムで済ませられる症状は、出来る限り後ろに下がってアイテムを使うように、と。

補給部隊でもあるので、回復アイテムは沢山あるのだ。使うであろう分は、既に援軍要請の時に伝令が知らせている予定だ。

また一人回復させ、下がらせる。襲撃があつてから、もう何人回復させただろうか。

そろそろ魔力も限界だ。もうすぐ休んでいる者と交代する時間だと思つので、それまでの辛抱

「おい、大丈夫か？ 交代の時間だ。まだ子供なのに、よく頑張つたな。あとは任せて休んでくれ」

つと、辛抱するまでも無かつたようだ。

俺に声をかけたのは5歳上の先輩だ。

ついこの間、僧侶として一人前と認められたらしく、この防衛戦で貴重な回復要員の中でも、実力は上の方である。

この人が前線に戻ってきたならば安心である。少なくとも、俺の数は活躍してくれるだろう。

「あ、はい。分かりました。では、少し休ませてもらいます」

「おう！ その間にパパツとモンスター共を全滅させてやる。お前にもう出番はないだろうから、ゆっくり休めよ〜」

俺の返事を聞いた後、そんな事を言いながら俺の頭を軽く叩いた後、怪我人の元へと走って行った。

先輩もキツイだろうに、年下の俺を安心させる為にあんな事を言ったのだろうか。

兄がいたら、あんな感じなのだろうか……。

前世も今も兄という存在がない為、そんな事を思いながら俺は仮眠をとる為に教会へと歩き出す。

前世。まだ誰にも話した事が無い、おそらく俺の最大の秘密。

この世界に転生したと認識したのは、5歳の時。朝起きたら自然と前世を思い出していた。

多少混乱したものの、現在の5歳という身体の自分に違和感はなく、前世を思い出した後も、この世界での記憶が自分の記憶であると認識出来た。

俺の前世は科学というものが発展していた世界で、今の世界みたいな魔法は存在していなかった。

いや、もしかしたらあったのかもしれないが、一般的には空想の産物であり、漫画やゲーム、映画などで使われていたものだ。

前世の記憶は28歳まで覚えている。

おそらくその年齢で死亡したんだと思うが、死亡直前の記憶はな

い。

ただ、この世界で生まれたので、気付かないで死んだんだろうなあ……程度に考えている。

この世界が夢、という可能性もあるが、この世界で生きていると認識をしている以上、あまり考えても意味がないと思う。

そんな答えが出ない事よりも、今生きていると認識しているこの世界と、生まれた国の事の方が問題だった。

メラ、ホイミ。この単語を聞いたら結構な人数の人達が、あるゲームを思い浮かべるだろう。

俺も前世で好きだったゲームであり、一時期は社会現象にもなったRPG。

”ドラゴンクエスト”

通称ドラクエ。DQとも書く。メラやホイミは、このドラクエシリーズの魔法なのだ。

そんな魔法がある世界に転生したのだが、この世界での記憶を思い出すと、ドラクエシリーズのどの世界でもなかった。

ドラクエはドラクエでも、俺が転生した世界はダイの大冒険だったのである。

俺が転生した世界である、ダイの大冒険。

主人公であるダイが、仲間達と共に魔王軍と戦い、大魔王を倒すまでの物語を描いた作品。

ドラクエの世界観でありながら、シリーズのどの作品でもない、新しい物語で作られた漫画だ。

その世界のホルキア大陸にある国。

多くの優秀な魔法使いや僧侶、賢者を輩出し、王族は偉大なる大賢者の血筋であるとされる、 PAPUNICA 王国。

原作の 15 年前、勇者アバンによって倒された、魔王ハドラーが拠点としていた地底魔城があるのがホルキア大陸であり、原作では不死騎団によって一度滅ぼされたのが PAPUNICA 王国である。

原作の 25 年前。そんな PAPUNICA 王国で、俺は生まれた。

## プロローグ（後書き）

『メラ』

火炎系呪文。

魔法力で発生させた火球（火炎）を敵にぶつける攻撃呪文。メラは火炎系で最も初歩的な呪文である。

『魔道士の杖』

魔力を秘めた宝石が杖の先端に埋め込まれている。メラの効果を持つ道具としても使用できる。

攻撃力15だが、主人公はメラを使う為に持ち歩いているだけなので、特に装備はしている訳ではない。

『ホイミ』

回復系呪文。

傷ついた身体を治癒し、失った体力を回復する呪文で、主に僧侶が得意としている。

基本的に相手の身体に触れなければ、呪文の効果はない。

ホイミは回復系呪文で最も初歩的な呪文である。

『薬草』

傷の治療に効く草を調合した古くから伝わる薬。

『毒消し草』

解毒効果のある草。

『満月草』

月光のもつ神秘的な力で、麻痺した体を治せる植物。

ついにダイ大投稿してしまった……プロット自体は、かなり前からあったんですけどねw

細かい肉付け作業、頑張ります。

パプニカ王国の、優秀な魔法使いや僧侶云々や偉大な大賢者の血筋などは、この作品オリジナル設定です。

あまり無理な設定ではないと思いますが、どうなんでしょうか？

## 第1話 両親（前書き）

第1話投稿です。

今後、原作で多く語られていない部分などに独自設定があったりしますが、違和感や矛盾点があったらご指摘お願い致します。

## 第1話 両親

テイギリス。

それが、この世界に転生した俺が両親に名付けられた名前である。生まれた国の古い言葉で賢い虎という意味があり、賢く強く文武に優れた人物に育ってほしいと願って名付けたい。

このテイギリスなのだが、元々は遙か過去に存在していたと言われる、偉大なる大賢者の逸話に出て来る虎の名前だったりする。

数ある逸話の中でも、一般人にはあまり知られていない話に出て来るマイナーな虎なのだが、人の言葉を話し大賢者に助力した白虎である。

その逸話から、テイギリス〃人の言葉を話す知恵のある虎〃賢い虎……という感じで伝わっている。

知恵ある虎ではなく賢い虎になっているのは、逸話を伝える歴史の中で誰かが大賢者の賢に肖った（あやかった）形にしたのでは？というのが、一般的な考えみだ。

そんな俺が生まれた国、パプニカ王国。

この世界の南東に、ホルキアという名の大陸がある。

そのホルキア大陸の沿岸部に建国されているのが、パプニカ王国だ。

海と山に囲まれた街並みは世界有数の美しさを誇っており、風光



明媚な港町として名高い。

国としての歴史も古く、古の時代から存在していると言われている大神殿は、一度は訪れておきたい場所であるとか。

また、パプニカ王国は優秀な魔法使いや僧侶に加え、多くの賢者を抱えている事でも有名である。

特産品は布や金属。

パプニカ王国は独自の製糸、冶金技術を保有しており、パプニカの布や金属などは通常の物よりも価値が高い。

法術で編まれた服や作られた武具などは、高熱や強い衝撃にとっても強く、更に法術の効果なのか、通常の物よりも軽い事が多い。

そのパプニカの布や金属は各国で高級品として扱われており、一般庶民にとっては、なかなか手が出しにくい物だったりする。

また、芸術品として美しい物も沢山あり、服やドレスなどのデザインや着心地も非常に良い為、富豪達にも人気がある。前世の高級ブランドみたいな感じだろうか。

ちなみに、パプニカの王族が神殿などで普段身につけている服などは、売れば安くても1万Gは軽く越えるらしい。

物によっては更に数倍の価値になる。

前世の約100円がこの世界の1Gくらいと言えば、如何に高級か分かるだろうか。

そんなパプニカ王国に生まれた俺は、両親から沢山の愛情を貰いながら、元気にすくすくと育っていった。

最初は前世なんて全く思い出しておらず、普通の子供とあまり変

わらなかつたはずだ。

そんな俺に変化があったのは、5歳の誕生日の朝だ。  
朝起きたら、前世の記憶をハッキリと思い出してたのだ。  
忘れていたものを唐突に思い出したような感覚で、前世も今の自分も自然と受け入れられた。

しかし前世は28歳、今は5歳。この差によって、思考は前世よりになってしまったのは、仕方ないと思う。ただ、5歳の子供が大人な言動をする訳にもいかず、多少子供っぽく過ごす事にした。  
前世や未来云々なんて、言ってもまず誰も信じない。むしろ、下手すれば悪魔の子扱いされる可能性すらあると思ったからだ。

どうしても言わないといけないような　それこそ言わないと生死に関わる様な状況にならない限り、この秘密は墓まで持っていてこうと思っっている。

前世を思い出してから約1週間。

とりあえず思考が大人ベースになったとはいえ、身体は子供だ。  
前世を思い出す前みたいに子供らしく行動しているつもりだ。  
さすがに両親からは少し変わったとは思われているかもだが、ある程度子供の範囲内で過ごしているから、問題ない……と思う。

そして1週間経った今日は、母さんが魔法を教えてくれる事になっている。

前世を思い出した次の日から、母さんにホイミだけでも使いたい

！と、3日かけてお願いしまくった結果である。

何故ホイミなのか。単純に回復手段が欲しかったただけだ。覚えておいて損は無いと思うし、普段も怪我の治療や体力回復に役立ちそうな気がするから。

母さんの手が空いている時に簡単な座学、基本中の基本　の、更に基本を丁寧に入れてもらい、今はいよいよ契約するところである。

「ええつと、ティギリス？　お、お母さんが教えた通りにやれば大丈夫だからね！　おおお落ち着いてやるのよ！？」

「うん、大丈夫。ちゃんと覚えているし、落ち着いてるよ」

どうやら俺が、契約する為の場所に到着してからずっと黙っていたので、母さんは俺が緊張していると思ったようだ。　　というか、母さんの方が緊張している気がする。

信じられるか？　母さん、これでもパプニカ三賢者の一人という、魔法のスペシャリストなんだぜ……。

母さんが三賢者の一人だからか、我が家は裕福みたいで俺は結構大きな屋敷に住んでいたりする。

俺の母さん。名前はレティカで、年齢は23歳。

12歳という若さで賢者として認められ、15歳で三賢者入りした天才である。

極大呪文など以外は、ほぼ全て習得しているらしい。

しかし使えないのが悔しいのか、極大呪文もイオナズンを習得しようとして今でも鍛練しているみたいで、この前『もう少しで使える気がするのになあ……』と、料理している時にボソツと呟いていた。

俺はそれを聞いた時、原作の過去において、魔王ハドラーの拠点が同じ大陸にあるのにパプニカが滅びなかった理由って、母さんが深く関係しているんじゃないかと疑ってしまった。

まあ実際には、原作の三賢者レベルなら現在の三賢者以外にも結構いるみたいだし、国としての強さだろう。

さすがに母さんもマトリフ師匠並に強くは無いただろうから、母さんは主力の一人程度のハズだ。

でも、人間にしては十分過ぎる強さなんじゃないかな。その分、近接戦闘はかなり苦手らしいけど。

ちなみに容姿だが、目の色は赤で髪は水色。髪の長さは背中辺りまで伸ばしている。

身長は成人女性の平均程度で、体型は細身。

仕事中等などの真面目な時は、キリツとした顔で自信に溢れ綺麗で格好良いと思えるのだが、家だと若干可愛い感じに変化する。

母さん曰く、プライベートで家族や親しい人といえる時、つまり今が素の状態らしい。きつと、公私をキツチリと分けているのだろう。

ぶつちやけ容姿はドラクエ3の女賢者を想像すると良い。あれの数年後みたいな感じである。

うん、美人だ。父さんがちょっと羨ましいと思うのは、マザコンになっってしまうのだろうか。

ちなみに母さんが三賢者だからか、我が家はそこそこ大きなお屋敷だったりする。

「とりあえず、母さんが落ち着いて。そんな状態で見られていたら、こっちまで落ち着かないよ」

「う……はい」

そんな泣きそうな顔にならなくても……。  
仕事中の顔しか知らない母さんの部下達にこの状態を見せたら、どうなるかなあ。

一度だけ仕事中の母さんを見た事あるけど、まさに出来る女って感じだったし。家で見た事ない顔だったから、一瞬誰かと思ったよ。

さて、未だに緊張して涙目な母さんはスルーするとして、早速契約をしようと思う。

おそらく契約を済ませるまでは、あのままな気がするし。

この世界の魔法は、基本的に魔法の儀式による契約をしないと使う事は出来ない。

契約が成功すれば、力量次第でその魔法を使えるようになる可能性があり、失敗したならまず使う事は出来ないと言われている。

契約するには通常は専用の魔法陣を地面に描く必要がある。

その魔法陣の中央に立つか座った後、精神を集中しながら魔法力を高め、  
を使いたい、覚えたいと念じるのが一般的だ。

他にも、神や精霊へ願ったり、複雑な詠唱や儀式をする方法もあるらしい。

今回の俺が契約するのは、回復呪文の初歩であるホイミなので、比較的簡単である一般的な方法で契約する。

俺は母さんが準備した魔法陣の中央に座り、両手を合わせ意識を集中する。

そして教わった通りに徐々に魔法力を高めていき、あとはひたす

らホイミを使いたい、覚えたいと念じる。

数十秒か数分か……集中していた為自分では分からないが、ある程度時間が経った時、何となく高めていた魔法力に違和感を覚えた。なんだろうと疑問に思った次の瞬間、高めていた魔法力が光となつて魔法陣から現れ、俺の身体を包んでいく。

そして数秒後、その光が俺の身体に吸収されるようにして少しずつ弱まっていく。

やがて完全に光が収まって、そこでようやく一息つく。

「……ふう。母さん、これって契約成功？」

おそらく成功したとは思うのだが、契約自体が初めてなので、一応母さんに確認する。

「うん、完璧！ さすがお母さんの息子、やっぱり才能あるのよ！ 天才？ 天才かしら？ 将来は三賢者……いいえ、世界に名を轟かせる大賢者ね。そして可愛いお嫁さんを貰って お嫁さん？ そんなのティグリスにはまだ早いわっ！ あ、でもそんな事に口を出したらティグリスに嫌われるかしら……うん。そうね、どうせならお嫁さんは家庭的で優しい子が」

緊張で涙目になっていた母さんはどこへやら、満面の笑みで契約成功を教えてくれた。

そして何やらクルクル周りながら色々話しているが、気にしない。落ち着くまでスルーしておこう。

下手に近付いたり声をかけたら、そのまま巻き込まれる気がする。おそらく抱きしめられながら一緒にクルクル回るか、脱線した話に付き合わされる結果になる。

お嫁さんについて話されても困る。俺まだ5歳だし。母さんの妄想の中では、俺は今いくつになっているのだろう……。

まあお嫁さん云々は別にして、俺は三賢者である母さんの息子だ。天才は言い過ぎだが、契約前から簡単な魔法程度なら使える才能はあるだろうとは思っていた。

それに昨日、祖母や母さんの血筋的に考えてある程度の才能はあるだろうって、父さんも母さんも言っていたし、契約を成功させる自信はあったのだ。

息子に才能はあると思っていたのに緊張で涙目だった母さんは、まあ……初めての子供の初めての契約だったから、だと思っ。

初步の呪文の契約を成功させただけで天才とか言っているのは、その反動で変な具合で親バカが発動したのだろう。

さて、魔法を使うのには第一に血筋、第二に才能が大きく関係する。

だから、いくら努力しても絶対に魔法が使えない、という事も多いのだ。

パプニカに賢者が多いのは、才能や先人達の教え以上に王族や重臣達の血筋が大きく関係している。

基本的に魔法の才能があればある程、剣術や格闘の才能が無い事が多く、魔法の才能が無い者は剣術や格闘による近接戦闘の才能がある事が多い。

だからこそ魔法の才能がある者は、身体を鍛えるよりも様々な知識を身につけたり、魔法力を高める事を優先する。

逆に魔法が使えない者や不得意な者が技術を身につけたり身体を鍛えれば、魔法が得意な者が同じ内容で鍛練をするよりも、近接戦闘の面では格段に強くなれる事が多い。

しかし、もちろん例外はいるので多数の才能がある者もいる。高いレベルで剣などの近接武器と魔法を扱う事が出来る人物だ。

原作のアバン先生やノヴァなどがそうだろう。あとは拳聖ブロキーナやマアム等も、その範囲に入るだろうか。

まあ、マアムは優秀な両親の才能を、上手く引き継いだ結果でもあると思うが。

そんな事を意味もなく考えていたら、クルクル回って妄想していた母さんが突然声を上げる。

「よし、今夜はご馳走にしよう！ ティグリスが好きな食べ物ばかりにしてあげるからね？ あ、その前にレオンに自慢してこよ」とっ

「え？ あ……ちよ、まっ」

「ご馳走宣言をしたと思ったら、俺の返事も聞かずに何やら誰かに自慢しに走って行く母さん。

うーむ。この後、実際にホイミを使うところまで教えてもらいたかったんだけどなあ……。

まあ、結構集中したから思っていた以上に疲れたし、今日は契約成功とご馳走で満足しておこう。

今から好物の魚料理を食べるのが楽しみである。



ところで、レオンってパプニカ王の名前だったような……。いや、まさかね。いくら母さんが三賢者とはいえ、王様を呼び捨ては無いだろうし。

あ、でも今の王様はかなり若くて、去年王様になったばかりなんだよな。

王子時代は優秀な賢者としても有名だったみたいだし、その時に知り合って仲良くなった、とかかな？

うーん、分からん。いや、そのうち判明するだろうし、家に帰って夕飯まで部屋で休む事にしよう。

契約を成功させ、母さんの謎が増えた日から約二ヶ月。母さんに魔法を使うコツ等を聞きながら、毎日ホイミの練習をしている。

魔法を使うのに重要なのは、集中力と魔法のイメージだ。

その為、俺は午前中は基本である瞑想をしっかりとやり、午後から魔法の練習をしていた。

ホイミを使う事自体は最初の一週間で出来たのだが、本当に使えるだけという状態だった。

紙で軽く切ってしまった指にホイミを使ったら、何となく分かる程度の小さい傷なのに、凄く時間をかけてようやく治るという感じ。

あまりの効果の薄さに若干涙目な俺だったが、母さん曰く5歳で使えるだけでも十分らしい。

それにまだ魔法力も低いし、魔法を使う事にも慣れていない為、

あまり効果が無いのは魔法を使うのが初めての者ならば、普通にある事だとか。

二ヶ月経った今は、小さな傷程度ならば、ある程度の早さで治せるようになった。まだまだ通常のホイミの効果まで遠いけどね。

ちなみに今のところホイミが活躍したのは、同年代の子供達と遊んでいる時だったりする。

転んで怪我をした子供にホイミを唱えて治してあげたのだ。それ以来勇者ごっこをして遊ぶ時、俺が僧侶役ばかりになってしまったのは、仕方ない事なのかもしれない。

さて、そんな感じで順調にホイミが使えるようになった俺なのだが、今は父さんの故郷であるアルキード王国に行く為に、父さんと2人で船に乗っている最中である。

父さんの両親は既に他界しているらしいのだが、父さんの姉は結婚してそのままアルキードに住んでおり、その人の娘がもうすぐ誕生日だとかで、そのお祝いに行く事になったのだ。

俺が以前行ったのが1歳〜2歳くらいの時らしいので、俺はほぼ初めての訪問と言っても良いだろう。さすがに1〜2歳の時の記憶は無いし。

ちなみに母さんは、三賢者としての大切な仕事がある為パプニカで留守番。

ちょっと寂しそうだったけど、約1週間程度の辛抱である。

だから三賢者を辞めてくるとか言わないでほしい。俺と父さんで説得するのに時間がかかって大変だった。

「テイギリス。もうすぐアルキードに着くから船を下りる準備をしておけ。忘れ物が無いようにな？」

「ん、分かった」

船での移動中とても暇だったので、船内で軽く瞑想しながら今までの事を考えていたら、甲板にいた父さんが船内に来てアルキードに近付いてきた事を俺に知らせてくれた。

俺の父さん。名前はイガートで、年齢は28歳。

身長は高く、おそらく180cm台の後半くらいはあると思う。

その高い身長に加え、鋭い眼光にガツチリとした体格、筋肉質な肉体なので、正直慣れてない人からしたら、威圧感がハンパない事だろう。

目も髪も色は黒で、髪の長さは結構短く切っている。

あと、父さんは魔法は使えないが剣を扱える。本人曰く、強さは普通の兵よりちょっと強い程度……らしい。

しかし体格や筋肉を見る限り、本当かどうか怪しい。ちょっと強い程度の身体じゃない気がする。

ちなみに俺は、今のところ母さん似の容姿なのだが、男としては父さん似の身長や体格になる事を祈りたい。

顔は、まあ母さんも真面目な顔は凜々しいから特に不満はない。似ているというだけで、女の子に見える訳じゃないし。誰がどう見

ても男の子である。

さて、父さんと共に船を下りる為の準備をしているのだが、準備と言っても俺の荷物なんて少ないからすぐに終わった。殆ど父さんが持っているし。

忘れたら困るのは、母さんに貰った魔道士の杖くらいだ。1500G程度の価値があるという、結構な値段の杖である。

ホイミを覚えた御褒美&護身用、らしい。

出発前に渡されたので、8割以上後者が理由だと思うが、子供に持たせるには物騒で高価過ぎると思うし、剣を扱える父さんがいるから心配ないと思う。

まあ、アイテムの効果で火炎呪文のメラを放つ事が出来るので、嬉々として貰っておいたが。

「父さん、準備終わったよ」

「うむ。では甲板に行こう。もうアルキード王国に着くだろうからな。誕生日パーティーは明日だから、アルキードに着いたら今日はゆっくり休むといい」

準備を終えた俺はそれを父さんに知らせ、二人で甲板に移動する。船での移動は慣れなかったので、父さんの言う通りアルキードに着いたらゆっくり休もうと思う。

ちなみに、本来なら既に昨日着いているはずだったのだが、母さんが駄々をこねたので一日遅れたのだ。

まあ船で間に合いそうになかったら、母さんにルーラさせるつもりだったけど、早めに説得出来て良かった。

父さんの故郷、アルキード王国。

アルキードがあるのはギルドメイン大陸。

ギルドメイン大陸は世界の中心にあり、世界で最も大きい大陸だ。豊かな国も他の大陸に比べて多くある。

そのギルドメイン大陸の南端の半島にあるのが、アルキード王国である。

余談だが、ギルドメイン大陸の形状は前世の日本の本島に似ており、本島を横にしたような感じだったりする。

アルキードは、千葉の房総半島の更に南部分に陸が続いた感じの場所、だろうか。

ちなみにパプニカ王国があるホルキア大陸は、形状が四国に似ている。

アルキードは原作の時期では半島ごと消滅していた国なのだが、この国が存在するという事は、今が原作の過去であるという事である。

まあ、その事実自体は、前世を思い出してからすぐに判明したんだけどね……。

何故なら、パプニカとアルキードは王家同士の仲が良く、距離的にも近いから船による交易なども盛んに行っている友好国なのである。

位置的には、アルキードはパプニカの北西辺りにあるしている。

パプニカにいれば、自然と色々な人の口から何度もアルキードの名を聞く事が出来る。

そんなアルキード王国の城下街に到着したのだが、父さんは入口付近の宿屋を素通りし、更に民家が建ち並ぶ方へ続く道も素通りし、そのまま大通りをスタスタ迷いなく進んでいく。

俺は父さんに手を引かれながら歩いているのだが、父さんはどこに行く気なのだろうか。

少し気になった俺は、率直に父さんに聞いてみる。

「父さん、どこ行くの？ 宿屋も、民家が集まっている場所への道も、なんか通り過ぎちゃったよ？」

「ん？ 何を言ってる……ああ、物心がついてからのティグリスには言った事なかったか。俺達が向かっているのは、あそこだ」

そう言っただけだが、とある場所を指差す。

いや、その先にはもう城しかないような……。

「あの城に俺の姉上が住んでいるんだ。姉上は王妃、つまりアルキード王の奥さんなんだ」

……………え？ マジで？

## 第1話 両親（後書き）

どうもです。第1話を読んでもいただき、ありがとうございます。  
本編でいくつか独自設定を盛り込みましたが、違和感とか矛盾が  
無いと良いですが、大丈夫でしょうか……。。

今回はあの人が登場です。お楽しみに！

ここから下は、登場した人物や魔法の簡単な紹介を書きます。  
登場人物紹介は、今後話数が増えて来たら別途用意します。

### ・人物

#### 『テイギリス』

この作品の主人公。第1話時点で5歳の男の子。  
転生者であるが、ダイ大世界に生まれてから5歳になるまで前世  
を忘れていた。

#### 『レティカ』

主人公の母親。第1話時点で23歳。  
現在、三賢者の一人である。パプニカ王と親しい模様。

#### 『イガート』

主人公の父親。第1話時点で28歳。

アルキード王妃の弟らしい。

『レオン』

パプニカ王。第1話では名前だけの登場である。  
現時点では詳細不明。

・魔法

『イオナズン』

空気中の成分を魔法力で合成し、相手のいる空間に大爆発を巻き起こす呪文が、イオ系の呪文だ。

数ある攻撃呪文の中でも最大級の破壊力をもった呪文であり、直撃を受けた場合のダメージは計り知れない。

イオナズンはイオ系で最も強力な極大呪文である。



## 第2話 アルキードの王女（前書き）

遅くなりました。こたつの魔力で眠っちゃってました。予約投稿しておけば良かった……。

さて。気を取り直して、第2話投稿です。

今回、加筆と修正を繰り返していたら、なんか予定より3000  
〜4000字ほど増えてしまいました。

どうなってるの……。

## 第2話 アルキードの王女

「……………王妃？ 王様の奥さん？ その人が父さんの姉だった？ ははは、父さんが冗談を言うなんて珍しい。明日は空からイオラの雨が降るに違いない。怖いなあ。あ、そういえばさつき道具屋に猫がいたけど、前世では犬を飼っていたし、この世界でも何か動物飼いたいな。……………いや待てよ？ ドラクエの世界観であるダイの大冒険の世界に転生したのだから、折角だしス

「どうした？ 城の中に入るぞ、ティグリス」

「……………え？ あ、うん」

軽く現実逃避していたら父さんが肩に手を乗せ軽く揺らしてきた為、俺は現実に意識を戻される。

現実逃避していたから少し返事が遅れてしまったが、父さんは気にした様子もなく、俺の手を引いて城の中へ入って行く。

「というか、父さん。いつの間にか城の前まで着いて、既に門番に招待状を見せて通行許可を得ていたんだね。全然気付かなかったよ。」

「イガート！ 久し振りだな。門番から知らせを受けて飛んできたぜ。王の所へは俺が案内しよう」

城の中に入ってすぐ、一人の兵士が声を上げながら近付いてきた。周囲にいる兵士さんとは少しだけ違う格好をしている。というか、父さんの名前を呼んだって事は知り合いか？

「ん？ おお、久し振りだな。そうか、なら宜しく頼む」

やはり知り合いみたいだ。声が聞こえた方向を見た瞬間、表情が柔らかくなつたし。結構親しい間柄なのかもしれない。

それから王様の元へ向かう途中、父さん達はお互いの近況報告をしている。

話を聞いてると、どうやらこの人は近衛隊の副隊長みたいで、父さんとは若い頃の同僚だったらしい。

そんな二人の話を聞きながら、俺は大通りで聞いた父さんの発言について考える。

父さんの姉がアルキードの王妃という事は、アレかな？ 俺はアルキードの王族と親戚関係？

……せめて来る前に教えてほしかった。普通に、ただの親戚に会う程度だと思っていたのに、実は王族に会うとか全然心の準備が出来ていない。

失礼の無いようにしないと。まさか5歳で王族と会う事になるとは思わなかった。

パプニカにいれば、レオナとかパプニカの王族をいつか見れるかなあ程度にしか考えてなかったし。

ふう……駄目だ。なんか考えてたら緊張と混乱がヤバイ。とりあえず深呼吸でもして落ち着こう。

すう……はあ。

「ん？ なんだティギリス、緊張しているのか？ 大丈夫さ。姉上を筆頭に皆優しいし、前連れて来た時はティギリスの事を凄く可愛

がっていたからな」

「イガートの言う通りさ。特に姫様が会うのを楽しみにしていたな。あの方は我々兵士にも優しく接して下さるし、君が相手なら終始笑顔かもしれないな」

「え？ えっと……うん。こっちらしたら初めて会う感覚だから、ちよっとだけ緊張してる。けど、優しいなら安心かな？」

……うん。深呼吸したからか、父さん達になにやら微笑ましいという表情で見られたが気にしない。多少は落ち着けたから、それで万事OKだ。

それにしても……アルキード王女が楽しみにしていた、か。

しかし、よく考えてみれば今回のコレは、転生してからの疑問を解決するチャンスなのかもしれない。

俺の疑問。それは、今が原作の過去である事はアルキードの存在で分かっているのだが、実は今が過去のいつぐらいなのかが分からないという事。

まだ、ハドラーによる地上侵略が起きた過去がない事から、おそらく原作の17年前よりは過去。

しかし、パプニカでバダックさんの名前を耳にした事あるので、物凄い過去という訳ではない。少なくとも、俺が22〜40歳くらいの間のどこかで原作開始時期になるだろう。

原作では確か、パプニカ王の詳細情報は漫画に載らなかったと思うから、今の子供な俺が判断出来る情報が年代的にこれくらいしか無いのだ。

まあ、載ってても王様の年齢を覚えてるか微妙だけど。

前世では原作漫画は全巻持っていたし、大好きで毎年何度か読み返していた。たまにネットのダイ大について語る掲示板なども見ていたし、更に言えばパーフェクトブックやアニメ版のビデオも持っていた。

しかし、それでも細かい情報を確実に100%覚えている訳ではない。

前世の記憶を思い出してからは、覚えてる限りの情報を紙に書いたが、それも細かい情報は合ってるか微妙だ。

重要な人物以外の年齢なんかは、曖昧にしか覚えていないし。

バダックさんが確か50代後半だった気がする……等がギリギリ覚えてる範囲だ。各国の王様とかロモス大会にいたメンバーの名前や年齢なんかは、ほとんど覚えていない。

さて、そこで何故今回が疑問解消のチャンスなのか。

先程、父さんの姉がアルキード王妃という事が判明したのだが、これが結構重要だ。

アルキードに来たのは父さんの姉の娘が誕生日だからであるので、もちろん父さんの姉である王妃には娘がいるという事。

王妃の娘、つまりアルキードの王女だ。

アルキード王女。

原作知識のある俺としては、どうしてもある人物が頭に思い浮かぶ。

原作主人公の母親であり、原作では既に故人であったアルキード王国の王女、ソアラだ。

もしも今のアルキードのお姫様がソアラならば、ソアラの年齢によつて原作の何年前か大体分かる。

確か原作主人公のダイを生んだのが18歳か19歳くらいだったと思う。

そのダイが原作開始時点で12歳だったはずだから、ソアラの年齢次第で原作開始までの年数が1年程度の誤差で判明するのだ。

まあ、今は原作開始よりも魔王ハドラーがいつぐらいに地上に来るかが知りたい訳だが、それもソアラの年齢で大体分かる。

俺が存在している時点で既に未来が違う平行世界という可能性もあるから、完全に同じじゃないかもしれないが、ある程度の基準にはなるだろう。

王女がソアラじゃなかったら更に過去だから、年代的に王女なんてソアラの父の姉か妹、そのどちらか辺りだろう。

原作にはいなかったけど、アルキードの細かい描写自体が無かったからなあ……。

もしソアラ誕生前だったら、原作の時間軸で俺はおじさん確定だな。

俺と父さんは副隊長さんに連れられ、しばらく歩いた後、とある部屋に案内された。今はその部屋の扉の前にいる。

あれか、やっぱり父さんが王妃の弟だから、いきなり部屋への案内なのだろうか……。玉座がある場所に行くのかと思っていた。

そんな事を考えていると、副隊長さんが部屋の中へと声をかける。

「失礼します。イガート様とティグリス様をお連れしました！」

「うむ、ご苦労。二人を通してくれ」

副隊長さんの俺達の呼び方がさっきまでとは違うが、さっきまでは半分プライベートで、今が完全な仕事モードなのだろう。

そんな副隊長さんの声に、中から男性の低い声が返事をした。おそらくアルキード王だろう。

「はっ！ 失礼します。どうぞ、お入り下さい」

入室許可を貰った後、副隊長さんは扉を開けて自分が入らず、俺達に対して道を譲る様に身体をずらした。

俺は父さんと共に副隊長さんへお礼を言い、部屋の中へと入る。

その後、副隊長さんは部屋に入らず扉を閉めた。プライベートな空間、という事なのかもしれない。中にも兵士等はいなかった。

そこには30代くらいの男性と女性が立っていた。おそらくアルキード王と王妃だと思う。

そして二人の間に、女の子が背筋を綺麗に伸ばして立っている。きつとあの子が王女だろう。俺より確実に年上だ。12〜13歳くらいかな？

「おお……二人共よく来た！ 久しいな、3年振りくらいか？ うむ、ティグリスは大きくなったな。元気そうだなによりだ」

「はい。お久しぶりです、アルキード王」

「あ……こんにちは。えっと、ありがとうございます」

そして、俺達が部屋に入り扉が閉まると同時に、男性が嬉しそうに声をかけてきた。

俺と父さんも無難に返事をしたが、俺は王族云々で緊張してたからか、少し詰まってしまった。

つい、初めましてと言いそうになったのは、ここだけの秘密だ。あっちは覚えているけど俺は覚えていないし、仕方ないと思う。

口に出して言わなかっただけでも褒めてほしい。

そして、父さんの返事で分かったが、やはり男性はアルキード王らしい。

まあ、副隊長さんに案内されたのだから、違っていたらある意味問題だ。

ちなみに王妃は微笑んで俺達を見ており、王女は嬉しそうにニコニコしている。しかし、王女は笑顔なのに若干そわそわしているのは何故だろうか。

「うむ。イガートは姉弟同士、妻と色々と話す事もあるだろう。娘のソアラもティグリスと会うのを楽しみにしていた。私も二人と色々話したいのだが、残念ながらこの後仕事がある……」。

まあ、それぞれ再会を楽しむと良い。特にソアラは早くティグリスと話したくて、今もウズウズしている事だしな」

「もうっ、父上！ ……ふう。ティグリス、久しぶりね？ 今日泊まるお部屋に私が案内してあげるわ。その後、色々とお話ししましょう？」

アルキード王の言葉に反応した後、王女 ソアラが駆け足で近



寄ってきて、俺の手を取って話し始める。

そしてそのまま俺の手を引いて扉の方へと歩き出そうとする。

あの、部屋に行くのは良いのだけど、俺まだ王妃と挨拶してないんだけど……。

「それでは、私はティグリスをお部屋に案内してきます。イガートおじ様も、母上の後で良いので、私とお話しましょうね？ ティグリス、行きましょう？」

「あ、はい。王様、王妃様、失礼しました。父さん、また後でね」

ソアラが微笑みながら大人達に宣言すると、俺の手を取ったまま扉へと歩き出したので、俺はなんとか三人へと言葉を発したが、最後の方の言葉は扉を越えるギリギリだったと思う。

そんなソアラだが、まだ大人ではないからか美人というより可愛い感じが強い。

年齢は、最初見た時に言ったが、おそらく12〜13歳くらいだと思う。

目は大きくクリクリしており、その眼差しは常に優しい感じである。

また、艶のある綺麗な黒髪を背中までストレートに伸ばしており、今はまだ髪型は原作とは違うみたいだ。成長したら変わるのかもしれない。

それから部屋に着くまで軽く雑談しながら歩いていたのだが、突然ソアラが不機嫌そうに俺にある事を言ってきた。

「ねえ、ティグリス？ ソアラさんじゃなくて、もつと親しい呼び方に出来ないかしら。なんか他人行儀で嫌だわ。私にとってティグリスは弟みたいなものだから、なんだか悲しいな……」

いや、年上だし王女だから一応ソアラさんって呼んでいたのだけれど……おそらく一人っ子だから、姉と弟みたいに接したいのだから。

ぶつちゃけ心の中だとソアラだったので、良かったかもしれない。純粹に仲良くもなりたいし、嬉しい申し出だ。

「分かった。じゃあ、ソアラって呼ぶね？ ……それとも、お姉ちゃんの方が良い？」

「ん、それはそれで捨てるのも……」

いや、冗談ですよ。お姉ちゃんなんて恥ずかしくて真面目に呼べる訳がない。

勿論この後、普通にソアラと呼ぶ事にした。ソアラが少し『お姉ちゃん』に未練があつたみたいだが、さすがに遠慮させてもらった。

ソアラの呼び方が決まってからまた話しながら歩いていると、ソアラが急に立ち止まった。

ん？ また何かお願いでもあるのかな？

「むう、お姉ちゃんも良かったなあ……あ、ティグリス、ここが貴方が泊まるお部屋よ」

ああ、どうやら部屋に着いたようだ。お姉ちゃん云々については触れずにスルーしよう。

ソアラと共に中に入るが、なかなか大きな部屋みたいだ。さすがお城の中といった感じである。

「あ、イガートおじ様も同じこの部屋だから、寂しくないからね？」

「いや、別に一人でも平気だけど……。まあそんな事よりも、わざわざ案内ありがとう」

中に入ってすぐ、ソアラが父さんも同じ部屋だと伝えてくる。

いや、まあ、俺はまだ子供だから一人部屋じゃないのは仕方ない。

「はい、どう致しまして。それにしても、あんなに小さかったティグリスが、もうこんなに大きくなって……。私が8歳の頃だから、もう3年も経つのね」

まあ、前が2歳だったみたいだしね。大きくもなるさ。というか、大きくなったのは当時8歳のソアラにも言える事だと思う。

それにしても、ここにきてようやくソアラの年齢が判明した。

3年前が8歳という事は、今は11歳だ。原作主人公であるダイを生んだのが確か20歳未満で、18か19のどちらかだったと思う。

そしてダイの年齢が原作時点で12歳だから……。今は原作の約20年前？

マジか。もう数年でハドラーが来るじゃないか。

パプニカなんて、ハドラーの拠点が同じ大陸にあるんだから、きっと激戦になるだろう。

うん。死なないように頑張ろう……。

「テイギリス大丈夫？ 顔が青くなってるわよ？ 船での移動が疲れたのかしら」

あ、なんか勘違いさせちゃった。いえ、船の疲れなんかより深刻な事が判明しただけですよ。

あと数年で魔王ハドラーとモンスター軍団との争いかと気付き、ちよっとブルーになってしまった。

「あ、うん。大丈夫。すぐに良くなると思う」

「駄目よっ。安静にして寝てなさい。父上達には私から言っておくわ。テイギリスはゆっくり休んで。疲れていたのに話に付き合わせてごめんなさいね？」

「いや、俺も話せて楽しかったし気にしないで。疲れてる自覚はないけど、ソアラに心配させたくはないし、一応休ませてもらうかな？」

「ええ。じゃあ、また後でね？ おやすみなさい」

ソアラが凄く心配そうにしているし、俺にゆっくり休むように言うってくるので、お言葉に甘えさせてもらって少し休む事にする。

休まないソアラが納得しそうにないし。

そしてあの後、ソアラが退室した後に一眠りしたのだが、熟睡していたのか朝までぐっすり寝てしまった。

途中、父さんは何度も起こそうとしたらしいが、結局起きなかつ

たから寝かせておいたらしい。

船での移動と、あと数年で現れるかもしれないハドラーが率いる魔王軍の事で、思っていた以上に心身共に疲れていたのかもしれない。

次の日、朝食を食べた後に元気になった俺を確認したソアラに連れられ、今は何故か城下街に来ていた。

というかソアラさんや、今日は昼過ぎから貴女の誕生日パーティーがあるのですが、貴女自身は準備とかは無いのでしょうか。いや、まあ本人が気にしてないから平気なんだろうけどさ。

この世界のお姫様は、若い頃はお転婆な所があるのがデフォルトだったりするのだろうか。

お城を抜け出して森でモンスターに襲われ、ギリギリでアバン先生に助けられたフローラ様や、見張りの兵をラリホーで眠らせて、気球を自分の国のだからと強奪したパプニカ王女のレオナ姫などなど……。

さて、今回ソアラがお城を抜け出した理由だが、実は俺に関係あったりする。どうやら、アルキードに来るのがほぼ初めてな俺を、ソアラ自ら案内してあげようと思ったみたいだ。

俺が朝起きてきて元気なのを確認したら、誘われたのだ。凄く楽しみにしてますって感じの満面の笑顔だったから、なんか断れなかった。

まあ抜け出したと言っても、実は近衛の副隊長さんやその部下らしき人が後を着いて来ている。さっきからチラチラ鎧姿が見えている。

子供だからと気を抜いて尾行しているのだろうか、バレバレである。ソアラは案内に夢中だから気付いていないが、結構分かりやすく尾行している。

護衛なんだろうけど、別にバレても問題ないから尾行に力を入れてないのかなあ。

「ティギリス、こつちよ。ここを抜けた先にあるお店が、凄く美味しいの。あの美味しさなら、大通りに店を出せばもっと人気出るのに……。マスターは、小さい今の店が好きだから、今ままが良いらしいのよ」

「へえ……く、詳しいんだね、ソアラ」

「ふふっ、そうでもないわよ」

しかしソアラはそんな尾行なんかには気付かず、色々な場所を案内してくれている。大通りだけかと思っていたら、他の道もどんどん進んで行くのだ。

「というか、思った以上に城下街について詳しい……もしかして、結構な頻度で来ているのだろうか。」

護衛の人達って、毎回隠れながら護衛しているのだろうか。もしそうなら……お疲れ様です。でも、鎧姿は目立ちます。普通の服にして下さい。

ちなみにソアラは一応偽名を使っていたりする。今はサンと呼ぶ

ように言われているが、他は帽子を軽く被った程度の変装だし、結構周囲にバレてると思う。

さっきお店のおばちゃんにもバレて、いくつか果物貰ってたし。ソアラは慌てていたけど、まさかバレないと思っていただけのだろうか。

まあ、バレバレな護衛のせいで王女が来ているとバレる事も多いみたいだ。

鎧姿の兵士がソアラの後ろを付いて来ているのを『ああ、またか』って、なんか納得した顔をしてる人が沢山いるし。

王女が城を抜け出すのとバレバレな尾行している護衛が、半分以上常化してないか？

どうしよう。原作のソアラのイメージが、どんどん崩れていく…。

周囲の対応を見る限り、国民には愛されているみたいだから良いのかもしれないけどさ。

さて、そんなこんなで色々な場所を案内してもらっていたら、お昼が近付いてきた。

思っていた以上に良い案内だったし、ソアラも色々案内出来て満足したみたいだから、そろそろお城へと帰る事に。

副隊長さん達もホツとした事だろう。あと数時間後にはパーティーだし。

「さて、と。お城に着いちゃったわね。ティグリス、ありがとう。」

とても楽しかったわ！ 私の案内どうだったかしら？」

「うん、俺も楽しかった。思っていた以上に色々な場所へ案内してくれたし、凄く良かったよ」

「ふふっ、楽しんでもらえたのなら良かったわ」

うん、楽しかった。パプニカですらあまり歩き回った事なかったから、アルキードの町並みは見ていて楽しかった。美味しい物も食べられたし、結構満足している。

その後、お城に着いた俺達はお互い部屋に戻り、パーティー参加の準備をする事に。

まあ俺は着替えるだけだから、しばらく部屋でのんびりしようと思う。まだ数時間はあるしね。

ソアラは、これからドレスを選ぶらしい。

……え？ まだ決まっていなかったの？ あ、事前にいくつか候補を決めておいて、当日に着るのを選ぶ……とかかな？

うーん。どうなんだろ？ よく分からない。

さて。そんなソアラと別れ部屋に戻ると、父さんと王妃、あと使用人らしき人が数人いた。

父さんは既に着替え終わっているみたいだ。早いな。

「お、ティグリス帰ってきたか。姉上が服をいくつか用意してくれたから、その中から選んで着替えると良い。お礼もしっかり言うの



だぞ？ では、俺は少しアルキード王の所へ行ってくる」

「え？ あ、うん、分かった。王妃様、ありがとうございます！」

俺が部屋に入った瞬間、父さんが矢継ぎ早に話し出し、そのまま部屋を出て行くとする。

何故そんなに急いでいるのか分からないが、とりあえず返事をした後、王妃様にもお礼を言う。

一応こつちでも用意していたが、王妃様が用意した物の方が良い物だろうから、俺はそちらを着ようと思う。せっかく用意してくれたのだしね。

「いいえ、どう致しまして。ふふっ……みんな、ティグリスを確保よっ！ うふふ、ソアラはもう自分で着るの決めてしまっし寂しかったのよね。ティグリスのは私達が選んであげるわ」

……え？ 俺の礼に対して優しく微笑んでくれた王妃様の、まさかの言動である。

そして、王妃様が優しく微笑みながら出した指示によって、俺は使用人達にあっさり捕獲されてしまった。

使用人の皆さんも、凄くノリノリである。

待つて父さん、笑いながら部屋を出ようとししないで。助けてよ。え、無理？ うん、何となく分かった。こういう時の女性って、なんか強いよね。

助け ちょ、待つて。自分で脱げるからっ！ みんな落ち着いて、誰か

王妃様達のオモチャにされてから数時間後、俺は城にあるパーティー会場にいる。元々は大広間かな？

ソアラがお城を抜け出すキツカケつて、王妃様のアレが原因じゃないかと俺は睨んでいる。

王妃様、使用人達と一緒にキャツキャウフフと凄く楽しんでたし。なんかパーティー前なのに疲れたなあ。主に精神的に。

さて、今回のパーティーだが、各国から招待客が来るとかではなく、アルキードの將軍や大臣など、それなりの地位にいる人達や富豪などが集まっている。

国外から来ているのは、俺や父さんみたいな王族などの関係者くらいだ。

まあ、祝いの品などは送られてきているみたいだし、各国の王などを呼ぶ年もあるらしいけど、今回は基本的に国内の者ばかりっぽい。

ちなみに城下街は現在お祭り状態。毎年お祝いしているらしい。午前中もお祭りの準備で賑わっていたし。

国としては経済効果狙いもあるだろうけど、国民や一般の兵達への慰安もあるみたいで、国からも色々お祭りに提供されているみたいだ。

ソアラ、両親にも国民にも愛されているなあ。

そうこうしている内に、なにやら場内が騒がしくなってきた。

どうやら、王様達が現れたみたいだ。ここからじゃ見えないし父さんと共に少し移動すると、王や王妃、そしてソアラが見えてきた。

王は派手ながらも、それが気にならない気品のある服装だ。おそらく歴代のアルキード王が公の場で着る伝統の衣服なのだろう。

次に王妃だが、こちらは清楚ながらも大人の魅力溢れるドレス姿だ。開いた背中部分が色っぽい。ソアラの母親なだけあって美人だから、凄く似合っている。まさに王妃って感じである。

最後に今回のメイン、ソアラ。

両肩を露出した、鮮やかな青色のドレスを着ている。

首元に銀色のロザリオを付けており、長い髪はアップに纏められていて少し大人っぽく見える。そして、耳には太陽の装飾がされたイヤリングがあり、赤い宝石が輝いている。

更に、その頭部には綺麗なティアラを付けていて、薄く化粧もしているみたいだ。

昼まで一緒にいたソアラなのだが、正直なんだか別人に見える。

見た目の違いもあるが、一番は雰囲気が全然違う。

ソアラというより、まさにアルキード王女。ソアラというお姉さんでは、完全にお姫様であるソアラ王女だ。

このソアラを見て、やはり王族というのは子供でも公私の分け方がしっかりしているのだと、俺はその時改めて思った。

生まれながらの王族というのは凄いな……。

あれからソアラへ話し掛けようかと思ったのだが、やはり色々な

人達からお祝いの言葉を貰っているみたいで、かなり忙しそうだった。

なので、しばらく父さんの側でモグモグと王宮の料理に舌鼓を打っていたのだが、そこへ王妃が使用人を一人連れて歩いてきた。

「ティギリス？ ソアラを休憩の為に下がらせたのだけれど、少し様子を見て来てくれないかしら。私と夫はまだ色々相手しないといけないし、出来れば仲の良いティギリスに頼みたいのだけれど……」

王妃様にソアラの様子を見て来るように頼まれてしまった。

あれか、ずっと王女として大人達の相手していたし、子供な俺が相手して息抜きの感じかな？

ソアラは俺を弟みたいに思っているっぽいし、昨日と今日でそこそ仲良くなれたハズだ。

「分かりました。ちょっと行って来ます」

「ええ、よろしくね？ ソアラがいる場所へは、この子が連れて行ってくれるわ」

俺は王妃様のお願いを了承し、使用人に案内してもらいソアラがいる場所へと向かう。

ソアラがいる部屋へとやって来た俺は使用人に礼を言い、早速扉をノックして俺が来た事をソアラに知らせる。

「ソアラ、俺だよ。ティギリス。今平気かな？」

「え？ テイギリス？ ちょっと待ってね、今開けるわ」

俺の声に反応したソアラが扉を開ける。

そしてソアラの姿が現れるのだが、近くで見ると本当に綺麗である。服装や化粧で変わるものだなあ……うん、将来はホント美人になるだろうな。

「いらっしやい、テイギリス。どうしたの？ あ、とりあえず中に入って話しましょう」

「うん、ありがとう」

俺が来た事が不思議なのか、キョトンとした表情でこちらを見ていたソアラだが、さすがに部屋の前で話す訳にもいかず、中へと入れてくれた。

そして中へ入った後、ソアラ自ら紅茶を淹れてくれる。どうやら部屋の中はソアラ一人だけのようだ。

まあ、来る途中には兵士さんが何人が護衛として配置されていたし、問題ないって事なんだろう。

「はい、熱いから気を付けてね？ それで、どうしたの？」

「ありがとう、ソアラ。んっと、王妃様に今ソアラが休憩中って聞いたから、少し様子を見に来たんだ」

ソアラが淹れてくれた紅茶を飲みながら、ここに来た理由を話す。というか、この紅茶美味しい……。

「ああ、母上ね。なるほど。ふーん……あ、寂しかった？ ふふふ

っ、ティグリス可愛いね」

「ちよ、違っ……もう。大人達の相手ばかりしていたから、疲れてないかなあって思ったただけだよ」

俺が話した理由で何かを察したソアラだったが、その後に悪戯っ子みたいにニヤニヤ笑いながら爆弾を放り込んできた。

明らかにからかう目的で言ったのが分かる。子供とはいえ、男の子に可愛いは勘弁してくれ。

「ふふっ、ごめんなさい。でも大丈夫よ？ 確かに少し疲れたけれど、慣れているもの」

……ふむ。精神的なものは無理だけど、体力はホイミで回復させてあげようかな？

そう思った俺は、ソアラの肩に手を乗せてホイミを唱える。

「ん？ ……ホイミ？」

「うん。精神的なものは無理だけど、体力だけでも回復してあげようかと思って」

「ありがとう、ティグリス。嬉しいわ。あ、うーん……」

俺が置いた手を不思議そうに見ていたソアラだが、俺がホイミを唱えたと分かり、笑顔でお礼を言ってきた。

しかしその後、右手の人差し指を顎に当てて何やら考え始めた。

「ん？ どうしたの？ もしかして、ホイミがあまり効かなかったとか？」

「ううん。ティグリスにお礼がしたいなあって思ってたね。……あっ、今思い付いたわ！ コレをティグリスにあげる」

お礼をしたいと言ったソアラは、何かを思い付いたらしく、ニコニコしながら自分が付けていたある物を外し、それを俺に差し出してきた。

「それは……ロザリオ？ いや、悪いよ。結構高そうだし、パーティーに身に付けてるくらいだから気に入ってるんじゃないの？」

さすがにコレを受け取るのはちょっと……。それに、絶対子供が持つには高い物な気がするなあ。

「大丈夫。首飾りは他にも色々あるし、コレはお守りとしてティグリスにあげる。パーティーが終わったらティグリスはパパニカに帰ってしまうのだから、お土産よ」

いや、確かにパパニカには帰るけどさ、子供が持って帰るお土産にしては高価な気が……。

「いや、でも……」

この後、何度も同じようなやり取りをしていたのだが、ついにソアラが最終手段に出る。

「……王女自らお土産をあげるのよ？ 受けとってもらわないと困るわ」

ぐふっ……。王女としてお土産を渡すなんて言われたら、断れないじゃないか。

いや、二人だけのこの部屋なら断れるのだが、断ったらパーティーで皆が集まる場所で宣言しそうなんだよな、ソアラ。

敗北を認めるかの様に肩を落とす俺に、ソアラはまだ大して無い胸を反らして、フフンと鼻を鳴らしている。

こんな仕草するんだな、ソアラって。11歳だし、まだまだ子供っぽい部分が残っていたか。

うーん、ソアラって意外と頑固なんだなあ。仕方ない、受け取るしかないか。

「はあ……。分かった。受け取るよ」

まあ、子供な俺には似合わないだろうし、ソアラからロザリオを受け取ったらポケットに入れておけば良いか。

「うんっ！ 大切にしてくれね？ あ、大切になって言ったけど、ちゃんと身に付けてくれると嬉しいかな？」

「……はい」

俺って、分かりやすいのかなあ……。



## 第2話 アルキードの王女（後書き）

お疲れ様です。第2話をお読みいただき、ありがとうございます。

前書きでも書きましたが、投稿前に加筆と修正を繰り返していたら、予定より少々長くなってしまいました。

描写が下手なのは、ご了承を。これから成長していきたいと思いません。指摘してもらえば出来る限り直しますけどね。

それでは、また次回更新をお楽しみに。

以下、登場キャラやアイテム、魔法の簡易紹介。

・人物

『ソアラ』

11歳。アルキード王女。主人公とは従姉弟同士である。

まだ子供だからか、原作のイメージを微妙に破壊中。10代後半になれば、きつ原作イメージに近くなる、と主人公は信じたい。

『アルキード王』

35歳。今回特に出番無し。名前すら決まっていない。むしろ付けない可能性大。

何故なら、アルキード王の呼称だけでやっていけそうだから。

『アルキード王妃』

32歳。主人公の父の姉。つまり、おばさん

昔はソアラに色々と着せて楽しんでいたが、一年前から微妙に拒否されている。

別に仲が悪い訳ではなく、着せ替えが絡まなければ非常に仲が良い。

『近衛隊の副隊長』

今後出番があるかすら不明。だから名前も無し。チヨイス役ならあるかもしれない。

・魔法

『イオラ』

第1話の後書きで説明したイオ系の中級呪文である。イオナズンの一つ下。

・アイテム

『銀のロザリオ』

守備力+4。値段は900G前後。銀細工を施した十字架のペンダント。主人公ティグリスがソアラから貰ったアイテム。ソ

アラが一年前に城を抜け出した時に自分のお金で買った品で、ソアラ曰くお守り。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7799z/>

---

ダイの大冒険 ~未来の為に~

2012年1月2日03時17分発行